![C:\Users\zenrin\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\OYLOII2Q\MC900228485[1].wmf]()園長だより　平成２７年７月号

うそから出た話

先月号の続きです。私が覚えている一番古いうそは，小学校１年生の初めての授業参観の時。それまで団体生活をしたことのない私は，教室の一番後ろの席で多くの知らない大人に囲まれていました。その中で授業が始まる前に母親の姿をチラッと確認したのが悪かったのでしょう。しばらくして後を見渡した時，母親の姿が目に入ってこなかったのです。その瞬間から私の心は不安に駆られ始めました。キョロキョロしたら行儀が悪いと叱られる・・・そして，どうしたらいいか…とっさの判断は，「机の脇にかけてあった帽子を床に落とし，それを探すふりをしながら母親の姿を探す。」というものでした。探すふりをしながら上を見上げ，必死で母を探しましたが見当たらない私は恐怖の限界に達し，しくしくと泣き始めたのでした。気づいてくれた担任の先生（元園長，小貫敬雄先生の奥様）が近づいて来たので，『帽子が…』と言うのと同時に，母親の姿を目にした私の記憶はそこで終わります。

　もう一つの昔話は，中学１年生のある日の若い女の先生の国語の授業でした。休み時間から友だち間でひそひそと話していた，卑猥な言葉の替え歌の歌詞の紙切れが私のところに回ってきた時，見つかってしまったのです。それを書いた友達と２人，職員室で怖い男の先生にこれはどういう意味だと訊かれた時，私は『わからないけど紙が回ってきたのです。』というような返事をしたと思います。わからなくはなかったのです。そんなスケベな（今風にいうと，エロい）子どもだとその女の先生や先生方みんなに思われるのが嫌だったのです。

　他人につかれたうそで今でも深く心に残っているもの…それは小５の時のこと。床に落とした消しゴムがなくなってから数日後，結構仲良くしていた友だちが持っていたので，それは自分のだから返して欲しいと言ったのですが，彼は自分の物だと言ってゆずりません。そしてとうとう先生のところへもっていって白黒をつけようとなりました。私にはそれが絶対に自分のものだという確信があったのですが，第三者が見てわかるようなはっきりしたものではありませんでしたのでその先生は相手の言い分を信用し，とうとう私の消しゴムは帰ってきませんでした。その経験から，私はうその罪を深く，はっきりと感じるようになったのですから，人生には何が幸いするかわからないものです。

　さて，弱い人間にはうそは必要です。うそによって守られる成功体験があり，うそなしでは生きていけません。しかし，他を深く傷つける場合もまた多くあるのがうそであるということを知る必要もあります。そういう知る経験を一つ一つしながら，人は成長していくのかもしれません。自らが深く，強く傷ついてはじめてうその罪を認識できるわけですが，はっきりと認識できるのがいつであるかというのが案外重要であるような気がします。思春期になってもうそでごまかそうとする人の周りからは人は遠ざかります。新聞沙汰になって初めて気付く人もいるようです。ですから，うそは早く発見され，叱られた方がいいのです。大人に，とりわけ親にうそが気付かれなかった人は不幸かも知れません。

　きつく叱れば，激しく怒ればうそはなくなるのかというと，そういうことでもありません。一つ一つその時々に，きちんと子どもと向き合うことこそが最良の方法だと思います。見過ごしてはいけないのです。で，見つけたらどうするか…答えは一つではありませんので，親にも勉強の機会が訪れるわけです。「子育ては親育て」

の所以の一つです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（園長　平澤　正則）